

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター
http://www.kwansei.ac.jp/RCC/index.html TEL:0798-54-6019

キャンパスの中のキリスト教シンボル(その6)



貝殻

RCC研究員、
社会学部助教授 宗教主事
打樋 啓史

学院本館正面入口の上部を見ると、貝殻のレリーフが三箇所に彫られています。この帆立貝の貝殻がキリスト教シンボルであることをご存知でしょうか。貝殻はキリスト教において「巡礼」のシンボルなのです。中世以来大きな巡礼地となったスペインの小都市サンティアゴ・デ・コンポステラに巡礼をした人々が貝殻を巡礼者の目印、また守護符として身につけてきたことは有名で、現在でもそこでは巡礼コースの順路や巡礼者用の宿泊施設に帆立の貝殻が目印として配されています。

が関係しています。乗っていた馬が暴走して海に投げ込まれた領主が、聖ヤコブに救いを求めた。すると馬は落ち着きを取り戻し、海から上がった。そのとき領主は馬が貝殻で覆われているのに気づいた、というものです。この伝説に基づいて、十二世紀以来、サンティアゴへの巡礼のシンボルとして貝殻が用いられるようになり、しかも、そもそもサンティアゴに隣接するガリシア海岸は帆立貝の群棲地であり、貝殻はキリスト教以前の古昔から海に秘められた命の起源や新しい誕生を象徴するものとされてきました。この地理的環境と古くからの貝殻のシンボリズムがキリスト教の伝説と結合して、貝殻がサンティアゴ巡礼の目印として定着したのでしょう。

巡礼は様々な宗教伝承において大切にされてきた行のひとつです。あえて日常を離れ、聖地を目指して長い旅をすることで、多くの人が自分を見つめ直し、生きる感動を見出してきました。また巡礼や旅は、私たちの人生そのものが旅であることを発見する機会なのかもしれません。所有にこだわらず、様々なことに固執せず、どこかに城を築く生き方ではなく、出会いに開かれ感謝と喜びをもって、軽快に歩いていく旅人の生き方。聖書はしばしば、そのような旅人の生き方を信仰者のモデルとして描きます。関西学院大学の正門を入るとすぐに見えるこの巡礼のシンボルは、「今日」という新しい旅を歩き出すように私たちに励ましているように思えます。

二〇〇五年度最初の「ニューズレター」をお届けします。二〇〇四年度のRCCの活動は充実したものでした。その中から、RCCフォーラムで講演いただいたロニー・アレキサンダー教授の文章を掲載致しました。また、共同研究の成果として出版された『暴力を考える』を社会学部助教授に紹介していただきました。

RCCの活動が関西学院のキリスト教主義に基づいた研究の充実を目指し、ますます実り豊かなものとなることを願い、栗林輝夫新センター長のもと、微力を尽くしたいと思います。

RCCセンター長・RCC教授 樋口 進

編集後記

現代社会における最大の課題といってもよい「暴力」。暴力とは何なのでしょう。二〇〇一年九月一日に起こった、いわゆる米同時多発テロに始まり、その後のアフガニスタン戦争、さらにイラク戦争と、「暴力」の世紀を生きる私たちにとって、その克服は緊急かつ必須の課題です。

このような認識のもと、キリスト教と文化研究センターでは研究プロジェクト「暴力とキリスト教」を発足させ、メンバーによる共同研究を積み重ねてきました。その成果をまとめたものがこの書物です。本書は三部構成になっており、第一部では、イラク戦争とキリスト教「正戦論」の関係(栗林)、靖国神社に見られる日本国家の暴力(前島)が具体的かつ批判的に分析されています。続く第二部は、暴力を克服していく手がかりが聖書からどう読み取れるかを、旧約(水野)および新約(嶺重、辻)のテキストに基づいて論じた部分。第三部では、暴力克服の可能性を、人間の欲望と宗教(栗林)・優生思想に潜む暴力性(舟木)といった問題を取り上げつつ模索した後、今後の具体的実践に向けた提

新書紹介 ●●

『暴力を考える』

(関西学院大学出版会 2005)

言をなしています(中道)。

本書は、総合コースの連続講義を念頭において出版されたものであり、二〇〇四年度から執筆者が交代で、本書の内容に基づいた授業を行なっています(月曜日五限、春学期開講)。キリスト教徒でない受講者にも理解できる言葉で、キリスト教の立場から暴力の問題について何を語りうるのかを、執筆者全員が必死に考え、議論しあつた成果がここに詰まっていると言えるでしょう。

暴力の克服は、二一世紀に生きる人間すべての課題であり、誰もこの問題から目を背けることはできません。本書をこゝに読いただき、共に考えるきっかけとしていただければと思います。

〔執筆者〕
前島宗甫 RCC教授(二〇〇五年三月末で定年退職)、栗林輝夫 社会学部助教授(宗教主事)、水野隆一(社会学部助教授、嶺重 神学専任講師)、辻 学 社会学部助教授(宗教主事)、平林孝裕(社会学部助教授)、舟木 謙 経済学部助教授(宗教主事)、中道基夫(社会学部助教授)

(社会学部助教授、舟木 謙 経済学部助教授(宗教主事)、中道基夫(社会学部助教授))
(社会学部助教授、舟木 謙 経済学部助教授(宗教主事)、中道基夫(社会学部助教授))
(社会学部助教授、舟木 謙 経済学部助教授(宗教主事)、中道基夫(社会学部助教授))

以来、研究のためのフォーラムを学内外に公開し、リーダー的な学識者を招いて意欲的な講演をしてもらうとともに、センター研究員たちもさまざまな主題のもとで研鑽を積み重ねました。最近では「暴力とキリスト教」「スピリチュアリテイと宗教」「民族・文化・宗教」などがテーマになりましたが、そうしたフォーラムと研究会の成果を、『生命科学と倫理』からはじまって、『イスラム教や日本宗教を論じた』民と神と神々と、『キリスト教と現代政治の』アメリカの戦争と宗教、『そしてスピリチュアルケアを語る』、また大学共同研究の『暴力を考える』キリスト教の視点から『など、精力的に出版して世に問うてきました。ただ若い研究機関としては破格の活躍です。

さて本年度の研究目標は、グローバル世界が直面する平和と紛争課題にどう対処するか、それをキリスト教の視点から探り、キリスト教平和学の構築をめざすというものです。日本でもこの二〇年ほどの間で平和学研究が盛んになり、大学にも様々なコースや

キリスト教平和学の先端的拠点、情報発信基地として



RCCセンター長・社会学部助教授
栗林 輝夫

二〇〇五年度から、キリスト教と文化研究センター長の任にあたることになりました栗林です。RCCが発足して間もない頃、センター長を務めたことがありましたから、今度が二回目の登壇になりました。

RCCが発足したのは一九九七年四月のことです。今年度で早くも九年目、来年には一〇周年の節目を迎えようとしています。出発当初は前途ほど遠し、思いを雁山の夕べの雲に馳すといった態度でどうなるものかと危ぶみました。しかしそれはまったくの杞憂で、RCCは理念にして実践にしても、経験と実績を積んで格段に発展し、当初から携わった者としては感慨深いものがあります。

それまで関西学院にはキリスト教教育研究の豊かな実績はありましたが、しかし激動する世界に対処するために一歩前に踏み出し、キリスト教と文化の学際研究を始めよう、そしてその成果を学内外に広く発信していこう、初代センター長の林忠良教授はそうヴァイジョンを描きました。それ

研究機関が次々に創られ、平和の政治学、地政学、人権問題、環境学など、さまざまな究明の努力がされています。しかしそうした現代の諸問題に複雑に絡んだ宗教、とりわけキリスト教という世界宗教の実相から考えるという研究はこれまであまりなされませんでした。日本には二〇〇三年の統計でいうと、キリスト教主義を標榜する大学は全国に七七、大学院は四一、短大は七三と、数多くあるのですが、キリスト教の理論と実践を基礎にした平和学はほとんど未開拓の分野です。

関西学院のユニークなところは、ミッション・スクールの自覚を大切に保持して、建学の精神が常に問い返されていることにあります。日本の教育機関としても実に独自の位置にあるのですが、研究面においても、キリスト教平和学の先端的拠点になれる高い可能性を秘めています。そんなわけでRCCが今後、広く教育界、学界、マスコミ、さらには海外への情報発信基地に成長できるよう、学内外の皆さんのご協力を願う次第です。

平和・暴力・ジェンダー

私たちが創り出す平和に向けて

神戸大学大学院国際協力研究科教授

ロニー・アレキサンダー



世界のどの軍隊を見ても、兵隊のほとんどは男性である。にもかかわらず、紛争下の女性は最近注目を集めている。それはなぜだろうか。

犠牲者は誰？

武力紛争が起きると、犠牲性になるのはだれで、どのような死に方をするのだろうか。一九〇〇年ごろの戦争では、犠牲者のほとんどが戦闘員で、一般市民は犠牲者のうちのおよそ五％に過ぎなかった。しかし、今日の戦争は違う。現在の武力紛争の犠牲者の約九〇％は一般市民であり、爆撃によって殺されるだけではない。たとえば、一九九四年のルワンダ虐殺では、二五万人ないし五〇万人の女性がレイプされ、そのほとんどが死亡

した。夫や子ども、親や兄弟の目の前でレイプされた人。銃でおなかを刺された人。膣に銃を入れられた人。流産するまで殴られた妊婦。もちろん、そのような暴力から逃げようとする人もいる。現在、国内外に難民となった人の数は五七〇〇万人を上回っている。そして、そのうちの約八〇％は女性と子どもである。

平和とは？

こうして戦争はすべての人に影響を及ぼすが、その影響はジェンダーによって異なる。今日はその原因をさぐるためにまず平和、暴力、ジェンダーという概念の意味を確認してから、ジェンダー・バイオレンスについて一緒に考えたいと思う。

平和は戦争ではない状態と定義されることが多く、戦争や紛争といった人為的暴力がない状態は、消極的平和(negative peace)と呼ばれる。これは確かに戦争

極めて困難である。平和のもう一つの重要な側面はその対象である。普段、平和づくりの対象となるのは人間や人間を構成員とする社会である。しかし、私はその対象に生き物のすべてを入れた。動物や植物、雨や風、太陽などは私たち人間にとって不可欠であり、地球環境が破壊されれば、私たちは生きていけない。そこで、私は平和のキーワードに自然や生物種の保全をトップに、自然も人間も含めての多様性、可能性、創造性、感受性や自由といったものにする。抽象的な定義を具体化する方法の一つは、こういったキーワードを考えることである。皆さんも、自分なりのキーワードをぜひ考えて欲しい。

ジェンダーとは？

構造的な暴力の一つに差別が指摘できるが、性別別はその一つである。そこで性とジェンダーについて考えよう。ジェンダーは普段、性セックス、性別との関係によって定義される。「性」とは生物学的な概念で、身体的特徴(外生殖器、内生殖器、遺伝子、ホルモンなど)を中心とするものである。これに対して「ジェンダー」とは、社会的な概念であり、歴史の中で社会的につくりあげられた女性と男性の社会的性差である。「ジェンダー」は、身体の性的特徴に関連

付けられ、性的な役割、意識、行動様式や、それに伴う社会関係を意味する。簡単にいえば、「女らしさ」「男らしさ」である。このように考えると、手術などをしていない限り、「性」を変えることができず、世界のどの国に行っても人間の「性」は基本的に異なることはない。これに対して「ジェンダー」は社会的に構築されているものとして、社会や文化によって異なり、変化可能なものである。

性やジェンダーを差異化するということとは、それぞれを二つのカテゴリーに切断し、それその間の間にも、カテゴリーの内部にも権力関係を持ち込むことを意味する。したがって、性・ジェンダーは、権力関係を語らずに定義できるものではない。ジェンダーと紛争、暴力の関係を分析するときに、もう一つた性・ジェンダーにかかわる権力関係がきわめて重要になる。

差異化された性とジェンダーについて論じるとき、二つのカテゴリーの関係性にも目を向けることができる。実際には、ジェンダーが「性(身体的な特徴)」によって形成されると同時に、身体に対する態度や考え方はジェンダーによってつくられる。したがって、二つの概念をきれいに切り離すことは困難であり、適切ではないかもしれない。また、差異化された性・ジェンダーに

はカテゴリーが二つしか存在しない。いずれのカテゴリーにも入らない人は、そこから排除されるか、むりやり当てはめられることになる。性・ジェンダーは果たして二つだけで十分だろうか。たとえば、いくつもの社会に存在する「第三の性」とをどう考えたら良いだろう。

「第三の性」は、半陰陽(身体的に両方の性的特徴を部分的にあるいは全体的に備えている人)やトランスジェンダー(身体的特徴と一致しないジェンダーをもつ人)によって構成される。私は、こういった「第三の性」を含めて性的多様性を広く認めたい立場をとっている。性・ジェンダーを二項対立として定義し、それ以外の性・ジェンダーに目を向けられない一般的な説明に不満が残る。しかしながら、本日のテーマはそれではないので、こういう形で一般的な定義に對

する疑問をなげつつ、一般的な定義に従って議論を進めることにしよう。

制度化される性・ジェンダー

私たちは、意識をしないのかかわらず、個人としてジェンダーを演じる。服装や食べ物、読み物、趣味などを自由に選んでいるつもりであっても、社会が期待する女らしさ、男らしさの影響を受ける。しかし、ジェンダーは個人の行動や選択肢に影響を及ぼす理由の一つに社会制度がある。結婚や戸籍、親権相続などは男女のカップルを前提としており、ジェンダーを制度化する役割を果たす。こういった制度や権利には上述した権力関係も現れる。社会によつては女性に土地の所有権が与えられていないなど、女性に男性より権利が制限されている場合もある。また、日本の男女雇用機会均等法によつて、法律上は平等であっても、運用上は違ったりする場合もある。

ジェンダー不平等は、こうして社会のあらゆる側面に見られる。女性の政治不参加、労働における機会や賃金の格差、教育や医療場合によつては食べ物へのアクセスなどがその例である。さらに、どの社会にもより直接的な性に関する暴力がある。セクシュアル・ハラスメント、レイプ、ドメスティックバイオレンス、人

身売買などがその一例である。武力紛争になると、これらの不平等や暴力がいつそう深刻になる。平時においても問題であるが、紛争の時にはすべてが悪化する。冒頭に触れたルワンダの事例はそれを示すもののひとつである。不平等なジェンダー構造の中で、性にかかわる暴力が頻発するが、裁かれることは比較的少ない理由の一つに周囲の態度をあげることができると「男性は性欲が強い」など、文化的な「男らしさ」「女らしさ」による正当化がほぼ無意識のうちに行なわれ、性暴力の責任を女性の方に押し付けたりして、犯罪について語ることを難しくする。たとえばレイプされた女性が服装などでその暴力を招いたといわれるように。しかし、そのような考え方は間違っている。不平等なジェンダー構造のなかで起こるレイプや性暴力は、「性」を武器とする暴力行為であり、「性的」な行為ではない。

状態は絶望的か？

私たちの社会にある不平等なジェンダー構造はさまざまな形で暴力として表面化する。これらの暴力をジェンダー・バイオレンスと呼ぼう。紛争となれば、人々の生活を支える様々な措置が機能しなくなり、問題がいつそう深刻になる。そしてそのしわ寄せはもとも弱い立場にいる女性たちになる。紛争に伴うジェンダー・バイオレンスに対して、何らかの対応策を導入しなければ、犠牲者は相次いでうまれてくる。たしかに、ジェンダー不平等を是正できれば問題は解決されるが、それは容易なことではない。構造変革を待っている時間がない。いったいどうすればよいだろう。

実は、国際社会は、紛争下にいる女性たちの問題に着目しはじめており、様々な対策が試みられている。国際レベルでは、国際刑事裁判所の設立によって

戦争に伴うジェンダー・バイオレンスを裁くことができるようになった。国連では、二〇〇〇年に安全保障理事会の決議一三二五号(紛争下の女性への対応)によって、平和交渉、難民への対応、平和支援活動、平和構築活動などの活動においてジェンダーの視点を導入し、女性の政治参加や社会参加を促すことが決定された。決議一三二五号は国家のみならず、さまざまな主体に積極的な役割をよびかけている。国内外のNGO、国際機関自治体、個人など、すべての人や団体には役割がある。もちろん、紛争に直接的にかかわっていない私たちにもできることがあるだろう。

構造的な暴力をなくし積極的な平和をつくるには勇気が要る。たとえば、ジェンダー不平等の場合、既存のジェンダー関係を変えていくことが必要である。自分自身のジェンダーに気づく必要があるし、自分の行動や周囲との関係を変えていく必要があるかもしれない。自らのジェンダーについて考えるのは大変かもしれないが、それが自分の行動範囲を広げるきっかけになる可能性が高い。自分の生活をジェンダーの視点で分析できたところで、世界に目を向けてみよう。あなたには大事な役割が待っている。それを早く見つけ出して行動をしてみよう。

